

# 北海道自転車旅行

1972年7月24日～8月8日

## 北海道へ

北海道は雄大でした。特に自転車で回っただけにその広さを実感しました。

一緒に全北電(北海道電力の少数組合・少数組合)の大会の交流に参加した T さん、K さんと別れたあと、単独での自転車旅行の開始です。札幌千歳空港に預けていた自転車を受け取り、早速勇んで国道 36 号線を苫小牧に向かって走りました。ところがです、トレーニングも何もしてなくていきなり自転車に乗ったものですから、そのきついこと。さらに尻が痛い。30 分も走れば休憩です。休憩ばかりでなかなか進みません。小さな座布団を敷くなどしましたが、数日間は尻の痛さに往生しました。でも、慣れとは恐ろしいもので、数日後には、どんなに乗っても少しも疲れなくなりました。

その日は何時ごろ出発したか覚えていませんが、苫小牧に着くことはできず、国道の脇の茂みにテントを張って野宿です。初めての野宿ですが、すぐ横が国道ということもあり心細さは感じませんでした。

自転車には一人用のテント、飯盒、ラジオ、8 ミリカメラ、着替えなどを積んでいました。フィルムカメラの 8 ミリです。勿論まだビデオカメラなどない時代です。せつかく北海道に行くのだからと奮発して購入しました。

自転車は、中古品を天草で購入しました。普通の自転車です。自転車を北海道に送るにちょっとしたトラブルがありました。今のように宅配便が発達していない頃の話です。運送業者に事前に問い合わせたら、1 週間ぐらいで着くという話でした。それで、出発の 1 週間前に持っていったら、1 ヶ月のはかかるというのです。話が違うじゃないかと言いましたが、どうしようもありません。結局航空便で送ることにしました。高くつきました。これなら北海道で新品を購入したほうが安くつきました。

話は帰りになりますが、自転車の旅が終わって、自転車やその他の荷物をこちらに送りましたが、本当に 1 ヶ月かかりました。今では、信じられない話です。

また、自転車はツーリング専用ではありませんでしたので、途中後輪の車軸が折れるハプニングもありました。

## 所持金 5 万円

所持金は 5 万円。帰りの交通費も含んでいますので、無駄遣いはできません。旅館にも泊まらずに野宿する覚悟です。食事も今のようにコンビニがある時代ではありません。食堂で食べる金はありませんので、できるだけパンなどで済ますことにしました。

2 日目は苫小牧からえりも岬を目指して国道 235 号線を南下します。右手は雄大な海、左はこれまた雄大な自然がそのまま残っている大地が続いています。しかし、まだ 2 日目、足と尻が痛くて痛

くて、これから先どうなるものだろうかと不安になるほどでした。相変わらず休憩優先で、ぼちぼち走ります。

このあたりを走りながら思ったことは、なんて勿体ないんだろうということでした。何がもったいないかと言うと、土地の利用です。こせこせした天草と比べて、手付かずの土地が多いのです。今ならだいぶ開発が進んでいるかと思いますが、当時は湿原など手付かずのままの土地がずーっと続いていました。

2日目はいくらも走らず、いや走れず、砂浜の海岸にテントを張りました。花の時期は過ぎていましたが、ハマナスの灌木が殖えている海岸でした。波の音を枕に星空を眺めて寝るのも最高の気分です。

## うちに泊まんね

3日目は、門別、新冠、静内各町の国道235号線を南下。このあたりは牧場がたくさんあり、のどかな景色が展開します。年配の方ならハイセイコーという馬をご存知だと思います。怪物と言われ、競馬ブームを引き起こしたハイセイコーはこの牧場の生まれです。

道はまだ舗装が完全になされておらず、砂利道で苦勞をしました。

浦河町のとある川に差し掛かったとき、橋の上から河原にキャンプするのにとてもいいところを見つけました。まだ、日が高かったのですが、走り初めで疲れていたこともあり、この河原でキャンプすることにしました。

この川で水浴びや洗濯をして、のんびりと過ごし休みました。もうかなり暗くなったとき、外でおばあちゃんの声がします。「学生さん、こんなところで寝ていると危ないからうちに来なさい」

もう遅いですからいいです、と断りましたがしつこく薦められたので、テントをたたみ、ついて行きました。そこは牧場でした。この牧場で思わぬ歓迎を受け、このたびのまさにハイライトのシーンですので、ちょっと詳しく述べたいと思います。

牧場には、おばあさんのほかに、お嫁さんと、従業員の方が数名おられました。もう食事は済んだといいましたら、ウイスキーと酒のつまみを作ってくれ、突然の見ず知らずの訪問者を歓待してもらいました。

どこから来ましたかと言う問いに、九州熊本の天草と言うところからです、と答えると知っていますとのことです。

えっ、天草を知っていると驚きましたが、その年、天草を舞台にしたテレビドラマが放映されていたのでした。

「藍より青く」という、牛深を舞台にしたNHK朝の連続ドラマです。主演は真木洋子、脇役に大和田伸也、佐野浅生、赤城春恵などです。赤木春恵の「アイヨー」という言葉が流行語にもなり、牛深を全国的に有名にしたドラマでした。牛深の通天橋の公園にはこのドラマを記念した石碑があります。また、真木洋子の役名「真紀」からとった、イカの塩辛「真紀しゃん漬」はとても美味しい塩辛で

今でも売られています。

そんなこともあり、口下手な僕もウイスキーの酔いも手伝って、話が弾みました。

ここで、2、3日手伝っていきませんかと言われましたが、サラリーマンで日程が限られているからとお断りもしました。

翌朝は、奥さんが大きな握り飯とサラミソーセージ、浴用石鹸くらいのチーズを弁当に持たせてくれました。

この弁当は、襟裳岬で美味しくいただきました。九州では考えられない北海道の人の人情に心が熱くなったことを今でも覚えています。

## 襟裳岬

4日目は、この牧場を後にして、更に南下、襟裳岬に経て、百人浜、黄金道路を通り、広尾町まで走りました。

海に眼を転ずると、小船でなにやら採っています。長いさおを海中に入れ、巻き取るようにして、昆布を採っているのです。そして採った昆布は海岸に引き上げ、砂浜に干されています。その昆布の長いこと。1本が10メートル以上あるのではないのでしょうか。先に全北海道電力労働組合との交流会のとき、1本の足が野球のバットより大きいタコの足を干してあるのを見ましたが、昆布がこんなに巨大だとは思いませんでした。とにかく北海道はすごい、でかい、実感です。

襟裳岬には、島倉千代子の「襟裳岬」歌碑がありました。襟裳岬の突端は岩礁がずっと沖まで続いており、300度くらいの展望が開ける雄大な景色でした。のちに、森進一が「襟裳の春は何もない春です(吉田拓郎曲)」と言う歌が出ましたが、何もないといえば何もない景色ですが、私にとってはとても素晴らしい景色でした。先に述べた、弁当が美味しかったかもしれません。

襟裳岬から今度は道道34号線を北上します。百人浜というこれもまた雄大な景色が展開します。国道から原生花園を横切り、海岸に出ると、なんと見渡すがきり砂浜が延々と続きます。そして人っ子一人見当たりません。何か妙な気分になり、素っ裸になり走りたい衝動に駆られました。かろうじて衝動を抑えましたが。

百人浜を過ぎると今度は黄金道路です。黄金道路と言うからさだめし素晴らしい道路かと思いきや、別の意味での黄金道路です。この道路は数十メートルはある絶壁にへばりつくように走っています。つまり、道路を作るのものすごい費用が掛かったために、黄金道路と呼ばれるようになったと言うことです。黄金道路を過ぎると暫くして広尾の町に出ます。

今夜は初めて普通の旅館に泊まることにしました。

旅館の風呂に入ろうとジーパンを脱いでびっくりしました。なんと、10センチくらいの水ぶくれが足いっぱいに出ているではありませんか。最初の2日間くらい半ズボンをはいていたため、やけどをしていたのです。曇り空だったが大丈夫だろうと思っていましたが、紫外線は強烈でした。もちろん、浴槽に浸かることは出来ませんでした。

5日目のメインは、池田町のワイン城です。そのため、湿原の中をはしる国道336号線にも魅力が

ありましたが、内陸の道を通って、池田町を訪れました。池田町は時の町長が、野生のブドウを使ってワインの製造販売をはじめた町です。ワインの名は十勝ワインといい、ちょっと辛口な美味しいワインです。町おこしのはしりですね。そのため、この工場は町営で、ワイン城と呼ばれる立派な建物があります。このワインを製造するまでの苦労を描いた本を読んでいたもので、ぜひともここを訪れてみたかったのです。

池田町からまた、海のほうへ。38号線を釧路へ向かいます。5日目の夜は、農業の小屋がありましたので、そこを無断拝借して寝ました。夏というのに、とても寒く、持っているものをすべて着込み寝袋に包まって寝ましたが、震えていました。

翌日(6日目)は、釧路を通りました。霧が深く、電球を何百とつけた漁船が霧の中にボーッと浮かび上がり、とても幻想的な町でした。

釧路から根室を目指します。ここからが難行苦行の道でした。大きなアップダウンの道をふうふう言いながら走りました。でも、ここらあたりになると、自転車にすっかりなれて、あんなに痛かった足や尻がうそのように快調になっていました。アップダウンでたいへんでしたが、楽しく走れました。この日は山の中にテントを張って寝ました。遠くで、犬か狼の遠吠えがして怖かった夜でした。

## カニで腹いっぱい

7日目は44号線を根室を目指して走りました。

根室に着いてまずしたことは昼食です。何を食べたかというカニ1匹です。1匹といっても花咲ガニの大きいやつで、1匹で腹いっぱいになりました。こじんまりとした店先に、湯がいたばかりのでっかいカニが山積みになっていました。値段もそんなに高くありませんでした。

話はそれますが、北海道の旅の醍醐味のひとつとして食べ物があります。カニはもちろん、とうもろこしや牛乳、ジンギスカン、ビール、ラーメン、ジャガイモなどうまいものがたくさんあります。とうもろこしや牛乳など北海道でなくてもありますが、この食べ物はうまさ違います。

牛乳は普段は飲まないのですが、ここの牛乳はとても濃くて美味しく感じました。また、ジンギスカンをはじめて食べました。貧乏旅行でしたので、飯に金をかけないようにしていましたが、時には贅沢もいいたろうと1回だけ食堂でジンギスカンを頼みました。といってもそんなに高いものではありません。ジンギスカンは兜のように盛り上がっていて、溝が入っています。鍋に、上にマトン(羊肉)を載せ、流れ出たマトンの油で下の溝に置いた野菜を焼いて食べるというものです。このジンギスカンがあまりにも美味しかったので、天草に帰ってから、とうとう鍋を買ってしまいました。

ラーメンは、縮れ麺でこれもまた美味しかったです。

さて、根室から納沙布岬まではズルをしてバスで行きました。時間が限られていたので、というのが言い訳です。納沙布岬からは、遠く、北方領土の歯舞諸島が見えました。あの島はソ連(当時)の支配下にあるんだなーと、なにか感傷的になりました。いまだに北方領土は日本に返ってきてい

ません。

納沙布岬からはまたバスで根室に引き返し、風連湖のちょっと先まで走りました。今夜の宿は漁師小屋です。もちろんここも無断拝借。一步間違えは犯罪行為ですがもう時効だから許してください。

ここからはすぐ目の前にでっかい島が見えます。国後島です。こんなに近いのにソ連領となっているなんて、信じられません。望遠鏡で覗くと人も見えそうな近くです。後に地図で距離を測ってみると20キロぐらいしかありません。自分の住んでいた島に帰れない人々や、豊富な水産資源を目の前にして獲れない漁民の方の苦勞が、実感としてわかります。

なぜか朝はとても早く目がさめました。午前4時ごろだったと思います。なんと、水平線からちょうど朝日が昇るところでした。緯度の高い地方の夏は日の出が早く日の入りは遅い。日中が長いのです。つまり素晴らしい朝日です。海から昇る朝日を見るのは初めてでした。

早く目がさめ、日が昇っているということはすることはただひとつ。走ることしかありません。

結局この日が一番長く走った日でした。疲れは全然ありません。

ここは、今は別海町ですが、当時は別海村でした。今はどう知りませんが、日本一広い面積という村ということでした。大阪や香川県よりもちょっと狭いという広さです。想像してみてください。

羅臼から知床半島の根付を横断し、ウトロに向かいます。この道も印象深い道でした。とにかく急激なアップダウンの道です。一生懸命登って、やっと頂上に着いたと思ったら、目の前にまた坂道がある。この繰り返しです。とても、自転車に乗って走れる坂ではなく、押して歩かねばなりません。その代わり下り坂はスイスイと気持ちよく走れました。

昼は、国道からちょっと坂を川に降りて、ラーメンを飯盒で炊いて食べました。水がとても冷たく、数秒として手をつけていられません。

また、この付近の山はなんだかとても魅力的に見えました。よし今度は山登りに来ようと思ったものです。未だに実現していませんが。また、道の両側には原生林が続きます。迷い込んだらきっと元には戻れないでしょう。それよりも入ろうという気にもならないほど、巨木がうっそうと茂っています。何か妖気が漂っている感さえします。

## 絶景 知床半島

ウトロに着くと、ちょうど夕日が海に沈むところでした。オホーツク海に沈む夕日はとても荘厳でした。ウトロの港にオロッコ岩という大きな岩がありますが、ロケーションもばっちりです。この日は朝日と夕日を堪能した日でした。

この日は適当な寝場所が見つからず、旅館に泊まりました。

次の日は遊覧船に乗って、知床半島の突端知床岬まで観光です。「知床の岬にハマナスの咲く

頃…」森繁久弥の歌が聞こえそうな未開の半島めぐりです。絶壁を流れ落ちるいくつかの滝が見事でした。知床半島の突端は台地上になっていました。

船から下りて、知床五湖めぐりをしました。この五つの湖もまた、素晴らしいの一言です。青い神秘的な水と湖面に映る木々。そして木漏れ日が水面にキラキラ輝いて、こんな美しい湖は見たこともありません。

ここで、熊の彫り物を買いました。今でも、自宅の棚に飾っています。「北海道旅行記念 1972年 7月31日 知床」と彫ってあります。

## 霧の摩周湖

知床の美しい自然に後ろ髪を引かれながら今度は網走に向かいます。ここで見た風景も北海道ならではのでしょうか。オホーツク海の大きなそして長い波が、規則正しく押し寄せています。雄大というほかに言いようがありません。網走では、当然網走刑務所訪問です。網走番外地の歌のイメージなどから想像していたのとちょっと違った風景でした。赤レンガの重厚な門はそれなりの雰囲気をかもし出していましたが、門の前に土産品店があるのには興ざめでした。

網走の町でもう夕方でしたが、もう少し足を伸ばして、網走湖畔のキャンプ場にテントを張りました。考えてみれば、ちゃんとしたキャンプ場に泊まったのはここだけでした。

ここからは海岸沿いから別れをつけて、内陸部へと入ります。本当はこのまま北上し、宗谷岬まで行きたかったのですが、時間と金が許しません。

網走湖畔から美幌まで走り、屈斜路湖、摩周湖、阿寒湖めぐりです。これも時間の関係でバスで行くことにしました。

霧の摩周湖という通り、摩周湖は霧に覆われてとうとう何も見えないままでした。後日新婚旅行でこの湖を訪れたときと、この日と打って違って晴天で、神秘的な素晴らしい景色を堪能することが出来ました。摩周湖も期待していたのですが、土産品屋が立ち並び、興ざめする湖でした。

阿寒湖から美幌に引き返し、また自転車にまたがりました。

美幌から国道 39 号線を北見へ。この日は北見近くの空き家にお世話になりました。

国道 29 号線は単調な道路です。道の両脇には畑が続き、テンサイ(砂糖大根)が植えられています。遠くに眼を転ずればなだらかな山並みが続きます。この時季は春でしたので、山は緑一色でしたが、新婚旅行でここを通ったときは、山全体が紅葉染まり、まさに絶景と言えるほどの素晴らしい景色でした。この日は営林署の小屋にお世話になりました。

次の日は、石北峠を越え、大雪湖を通り、層雲峡の滝などを眺めながら、廃業した旅館に泊まりました。北海道はこのように空き家や小屋が多く、寝場所の確保には意外と苦勞することなく、助かりました。

## 札幌から支笏湖へ

あとは、旭川を経由し札幌への道を走るだけです。旭川からは国道 12 号線、北海道の幹線道路だけに車が多く、車の風圧などに苦労しながら慎重に走りました。

地図を見ると分かりますが、滝川から美唄まで30キロくらいの直線道路が続きます。しかし、アップダウンがあるため、それほど直線道路をはしっているという感覚はありませんでした。

その日は札幌の手前の空き家にお世話になりました。

札幌は、さっと通り抜け、支笏湖へ向かいます。支笏湖への道は霧が深く、洋服もびしょ濡れになるほどでした。

支笏湖では、ユースホテルに泊まりました。ここで、単車で北海道を回っているという会社員と友達になり、ジョッキをかたむけながら、これまでの旅の様子などを語り合いました。支笏湖はひっそりとしてなかなかいい湖でした。日程に余裕があれば湖岸を走るのも楽しそうでしたが、先を急ぐことにしました。

支笏湖から苫小牧を経由して、白老町、登別へと向かいます。白老では、アイヌの民族舞踊を見ました。10 人くらいの民族衣装を着たアイヌの人々が輪になって、単純な踊りを踊っていました。少数民族のアイヌも今や見世物になったような感じを覚え、ちょっと悲しくなったことを覚えています。

## オロフレ峠の夕陽

登別は、有名な温泉町です。急いでいるとはいえ、温泉に入らぬてはありません。ゆっくりと温泉につかり、久々にさっぱりしました。

登別から、最後の難関オロフレ峠に挑戦です。後日ここを車で通った時は、舗装もされており、トンネルもできていました。あっという間の峠越えでした。しかしこの時は、まだ舗装も完全でなく、トンネルもありません。とても暑い日でもありました。急坂なので、自転車は押して登ります。誇りまみれで汗だくになって登っていると、車で登っている若い女性の方から、「がんばって」と声を掛けてもらいました。うれしくもあり、こんちくしょうという気持ちもありました。

あえぎあえぎ、やっと峠を登りきった時、日が暮れようとしていました。峠を降りるのは、登る時苦労した分爽快そのものです。しかも、真っ赤な夕陽が沈む光景を見ることができました。これぞ旅の最高の一瞬です。

洞爺湖に着いたときは薄暗くなっていました。湖畔の適当な場所でテントを張りました。

旅の最後の野宿の夜でした。

このたびの5年後に、洞爺湖のすぐ南にある有珠山が大噴火し被害も大きく、温泉宿も数年間休業に追い込まれました。噴火の情報を聞いた時、山のすぐ下でキャンプをしたんだなーと感傷に浸りました。

洞爺から虻田町へ抜け、ここで自転車とお別れです。自転車屋さんで分解荷造りしてもらい、他の荷物と共に自宅へ送りました。

来る時は、完成品の姿で送ったので、荷造りも大変でしたが、分解するとコンパクトにまとまり簡単です。

## 自転車と別れ帰路へ

虻田からは列車で函館へ、函館からは青函連絡船に乗り青森へ向かいました。青函連絡船は、青函トンネルの開通で、1988年に廃止され今はありません。

青森からは急行列車で上野駅に向かいます。青森駅では夕方に乗り、よく朝早く上野駅に着きます。急行列車も今はありませんが、何しろ直角の硬い椅子で一夜を明かすのは結構つらいものでした。

朝早く着いた上野駅では、時間がありましたので、アメ横を見物したりしました。上野駅をうろろしていたら、「お兄ちゃん、仕事あるね」と声を掛けられました。薄汚れた格好でうろろしていたので、仕事にあぶれていると思われたのかもしれませんが。声を掛けた人は多分自衛隊の勧誘ではなかったかと、思っています。

東京からは新幹線で大阪へ。大阪では大坂球場でファンだったの南海ホークスの試合を見て、天草に帰ってきました。

今思えば、今では無くなってしまった青函連絡船、南海ホークス、大阪球場、八ミリカメラ、舗装が不十分の北海道の諸道など、青春時代に貴重な体験をしたのがいい思い出です。